

令和3年度病虫害発生予報 第7号（11月予報）の送付について

このことについて、下記の通り発表しましたので送付します。安全・適正な防除についてご指導をお願いします。

今月の発生に注意を要する病虫害

作物名	病虫害名	発生時期	発生量
アブラナ科野菜	コナガ	平年並	やや多い
キク	褐斑病・黒斑病	平年並	やや多い
キク	ナミハダニ黄緑型	平年並	多い
野菜類・花き類共通	ハスモンヨトウ	平年並	やや多い

○気象予報（近畿地方の1ヶ月予報：10/23～11/22）

気温：高い 降水量：平年並 日照時間：少ない

○今月の農薬適正使用のポイント

- ①イチゴ等の授粉にミツバチやマルハナバチなど訪花昆虫を使用する場合や、天敵製剤を放飼する場合は、使用する農薬の影響日数をあらかじめ確認し、危害が発生しないようにしましょう。
- ②ハウス内で農薬散布する場合は、ハウスサイドを開けるなどして通気を確保しましょう。閉め切った状態で湿度が高くなると、薬液の乾きが遅くなり、薬害が発生しやすくなります。
- ③夏秋栽培が終了して農閑期に入る方は、冬の間農薬庫内の在庫を確認・整理しましょう。使用期限が過ぎた農薬は、登録制限によってラベル通りに使用しても残留基準を超過する場合がありますので、十分注意してください。

○今月の病虫害対策のポイント

- ①冬作物では、秋のうちに苗で持ち込んだ病虫害や飛来する害虫を徹底防除して、冬に残さないようにするのが基本です。結球するアブラナ科では結球するまで、施設栽培ではハウスサイドを閉め切った直後までが勝負所です。農薬への抵抗性発達状況などにも留意しながら、効率的に防除してください。
- ②イチゴの施設栽培で天敵製剤を利用する場合は、天敵への影響日数を考慮して農薬を選ぶとともに、葉かきと防除作業を放飼までに済ませておき、放飼後2週間程度はこれらの作業を控えましょう。今年始めて導入する場合は、最寄りの農林振興事務所などの指導を受けて下さい。
- ③夏秋栽培が終了して農閑期に入る方は、改めて今年の防除履歴を振り返り、次年度の改善に繋げましょう。

I. 普通作物

1. 水 稲

(1) 縞葉枯病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 10月下旬の巡回調査では、収穫後に発生しているひこばえで、縞葉枯ウイルスによると思われる葉の黄化症状は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 年内に耕起を行い、ウイルスに感染した稲株を腐熟させるとともに、媒介虫であるヒメトビウンカの越冬場所を無くして、越冬密度を低下させます。
- 2) 水田周辺のイネ科雑草は越冬場所となるため、枯れ草も含めて除草を行います。
- 3) 発生地域では、次年度、ムギ畑やイネ科雑草周辺での育苗は避け、移植時にはウンカに適用のある箱施用剤を必ず施用します。

(2) スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ)

防除上の注意事項

- 1) スクミリンゴガイは寒さに弱く、本田の深さ 6 cm までの土中に潜って越冬します。発生地では冬の間に耕起して、ロータリーで破碎するとともに貝を地上に出して寒気に当てます。冷え込みがきつくなると予想された夜の前の日中に実施すると効果的です。
- 2) 水田の横の水路でも越冬しますので、多発地では冬の間に水路の泥上げを行います。

II. 果 樹・チ ヤ

1. チ ヤ

(1) チャトゲコナジラミ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 平年並みの越冬世代幼虫の発生が認められています。

防除上の注意事項

- 1) 発生の多い園では、2月末までにトモノールS又はラビサンスプレーで防除します。この時期の防除は次年度の密度抑制に効果的です。年内と1～2月の2回散布でより防除効果が高まりますが、赤焼け病の常発地では年明け後に行います。
- 2) すそ部を中心に葉裏に薬液がかかるよう、ていねいに散布します。

III. 野菜類・花き類

1. イチゴ

(1) うどんこ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 10月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 8.3%、発病葉率 0.1%でした。
- 2) 外張り資材の被覆後には、新葉や花梗を中心に病勢が急速に進展します。

防除上の注意事項

- 1) 発生ほ場では、直ちに防除を開始し、開花期までに防除を徹底します。防除が遅れると出蕾後の花梗や果実に発生し防除が困難になるので、特に注意します。
- 2) 薬剤散布前には必ず下葉かきを行い、動力噴霧機の圧力を下げて、薬液が株全体の葉裏にむらなくかかるよう丁寧に散布します。
- 3) 薬剤は同一系統の連用を避け、必ず薬剤散布の2～3日後に葉裏を観察し、防除効果を確認します。白い菌そうが薄くでも残っている場合は、薬剤の防除効果が低下している可能性があるため、その薬剤の使用を控えます。

(2) ハダニ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 10月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 25%、寄生葉率 3.8%でした。
- 2) 外張り資材を被覆した後は雨があたらず、気温も上昇するので、ハダニが増加しやすくなります。

防除上の注意事項

- 1) ハダニ類は葉裏に寄生し、発見が難しいので葉かきの際に注意して観察します。
- 2) ナミハダニは薬剤による防除が困難なので、天敵製剤を導入します。使用する場合は、あらかじめ天敵に影響の小さい殺ダニ剤を散布してハダニ密度を低下させ、ミヤコカブリダニ製剤とチリカブリダニ製剤を同時放飼します。気温が低下すると増殖が遅れるので11月上旬までに放飼します。また、放飼後1週間程度は薬剤散布と葉かきを控えます。使用できる薬剤に制限がありますので、使用を検討する際は、各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。
- 3) 薬剤散布で防除する場合は、動力噴霧機の圧力を下げて葉裏にも十分薬液がかかるように噴口を上向きにして、株の周りを回すように散布します。葉かき後の葉数の少ない時期の散布が効果的です。
- 4) ハダニが寄生した葉はハウス外に持ち出して処分します。

(3) アブラムシ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 10月下旬の巡回調査では、発生ほ場率17%、寄生株率0.3%でした。

防除上の注意事項

- 1) ミツバチ放飼後には、殺虫剤を使用しづらくなりますので、開花するまでに防除を徹底します。ミツバチに対する薬剤の影響については、各農林振興事務所または病害虫防除所にお尋ねください。
- 2) ハダニ対策の天敵製剤を導入している場合はウララDF、チェス顆粒水和剤のいずれかで防除します。その際、散布薬液が乾くまで、ミツバチをハウス外へ持ち出します。
- 3) ネオニコチノイド系殺虫剤に対する感受性が低下したワタアブラムシを確認していますので、同一系統薬剤の連用を避け、効果が低い時は各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談下さい。

2. アブラナ科野菜

(1) ベと病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 10月下旬の巡回調査では、ハクサイで発生ほ場率11.1%、発病株率0.2%でした。ダイコン、キャベツ、ブロッコリーでは発生は認められていません。
- 2) 気温15~20℃で連続した降雨があると、発病が助長されます。

防除上の注意事項

- 1) 発病株や残さは伝染源となりますので、発生初期に除去・処分します。
- 2) 晩秋期の発生が予想されるほ場では、使用時期(収穫前使用日数)に注意して、降雨前に薬剤による防除を行います。

(2) コナガ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 10月下旬の巡回調査では、ダイコンで発生ほ場率13%、寄生株率0.3%でした。ハクサイ、キャベツ、ブロッコリーでは発生は認められていません。
- 2) 農業研究開発センター(桜井市池之内)のフェロモントラップへの誘殺数は平年並となっています。

防除上の注意事項

- 1) 薬剤感受性が低下しやすいため、同一系統薬剤の連用を控えます。
- 2) 県内で殺虫剤感受性が低下した個体群の発生を確認しているため防除薬剤の選択に注意します。効果が低い時は各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談下さい。
- 3) 防除所による感受性検定では、アフーム乳剤、ベネビアOD、グレース乳剤、スピノエース顆粒水和剤、エスマルクDFの効果が優れていました。作物によって使用できる薬剤が異なるので、登録内容を確認してから使用するようになります。

(3) アブラムシ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 10月下旬の巡回調査では、発生ほ場率と寄生株率はそれぞれハクサイで11%と0.2%、ブロッコリーで17%と0.7%でした。ダイコンとキャベツでは発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) ウイルス媒介を予防するため、葉裏や芯葉への寄生の有無を注意して観察し、発生初期の防除を徹底します。

3. ホウレンソウ

(1) ベと病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 10月下旬の巡回調査では、発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 今後、天候不順が続くと、特に発生しやすい条件となりますので、施設内の高湿度を避けるため、換気と排水対策を徹底します。
- 2) 発病株は伝染源となるので、見つけ次第、除去処分するとともに、収穫残さはハウス周辺には放置せず、袋に入れて密封し、腐熟させてから処分します。
- 3) 前作で、べと病が発生したほ場では、ランマンフロアブルやレーバスフロアブル等の散布剤による予防を行います。
- 4) レース 1～10 抵抗性品種でも発病が確認されています。天候不順時には、薬剤による予防散布を励行します。

(2) ホウレンソウケナガコナダニ

予報内容 発生時期：平年並 **発生量**：平年並

予報の根拠

- 1) 10 月下旬の巡回調査では発生は認められていませんが、11～12 月は被害が多い時期ですので、注意が必要です。

防除上の注意事項

- 1) 本葉 2 葉期のカスケード乳剤、4～6 葉期のアフーム乳剤散布を組み合わせた体系防除を行ってください。
- 2) 寒熟ホウレンソウ栽培は作期が長いため、必要に応じて追加防除を行います。
- 3) 被害株や収穫後の残さはハウス内にすき込まず、ほ場外に持ち出して処分します。
- 4) 稲ワラ、モミガラ、未熟堆肥などの有機物を土壌に投入すると発生を助長します。特にモミガラの使用は、モミガラ堆肥も含め控えます。有機物を投入する場合は、最低限の量の完熟堆肥を使用し、投入後の 1～2 作目には必ず前述の体系防除を行います。
- 5) 冬に休作するハウスでは、栽培終了後早めに被覆ビニルを除去し、できるだけ長期間、降雨にさらすことにより、春作の被害が少なくなる傾向があります。

4. ネギ

(1) べと病

予報内容 発生時期：平年並 **発生量**：平年並

予報の根拠

- 1) 10 月下旬の巡回調査では発生ほ場率 16.7%、発病株率 1.7%でした。

防除上の注意事項

- 1) 春作で発生したほ場では、ランマンフロアブル、リドミルゴールドMZ やベトファイター顆粒水和剤等の殺菌剤で予防散布を行います。

5. キク

(1) 白さび病

予報内容 発生時期：平年並 **発生量**：平年並

予報の根拠

- 1) 10 月下旬の巡回調査では、発生は認められていません。
- 2) 夏の高温により菌の発育が抑制されましたが、気温の低下と多雨により発病が促進する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 次年度作に発生を持ち越さないために、親株の防除を実施します。

(2) 褐斑病・黒斑病

予報内容 発生時期：平年並 **発生量**：やや多い

予報の根拠

- 1) 10 月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 40%、発病株率 1.8%でした。

防除上の注意事項

- 1) 次年度作に発生を持ち越さないために、親株の防除を実施します。
- 2) 密植や過繁茂にならないよう通風を図るよう管理します。
- 3) 発生ほ場では下葉の発病葉を直ちに除去し、埋没処分します。
- 4) 発生初期にダコニール 1000 等で防除します。

(3) ナミハダニ黄緑型

予報内容 発生時期：平年並 発生量：多い

予報の根拠

- 1) 10月下旬の巡回調査では発生ほ場率 100%、寄生葉率 45.6%と平年に比べ多い発生でした。

防除上の注意事項

- 1) 次年度作に発生を持ち越さないために、親株の防除を実施します。
- 2) ハダニの寄生部位である葉裏に薬液がかかるよう心がけます。
- 3) 殺ダニ剤に対する感受性の低下が進んでいます。同一系統薬剤の連用は控えます。

6. 野菜類・花き類共通

(1) ヨトウガ類

予報内容 発生時期：平年並

発生量 ヨトウガ、シロイチモジヨトウ : 平年並
ハスモンヨトウ : やや多い

予報の根拠

- 1) 10月下旬の巡回調査では、ヨトウガの発生は認められていません。
- 2) ハスモンヨトウの発生ほ場率は、ダイコン 13%、キャベツ 17%、ブロッコリー 17%でした。イチゴ、ハクサイ、ネギ、ハウレンソウ、キクでは発生は認められていません。
- 3) シロイチモジヨトウの発生ほ場率はネギ 33%でした。イチゴ、ハクサイ、キャベツ、ダイコン、ブロッコリー、ハウレンソウ、キクでは発生は認められていません。
- 4) フェロモントラップ誘殺数は、いずれも平年並で推移しています。

防除上の注意事項

- 1) 発育が進むと薬剤の効果が劣るので、若齢幼虫期での防除が重要です。
- 2) ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、ヨトウガは、それぞれ有効薬剤が異なります。ほ場をよく観察し、発生種に応じた薬剤を選択します。有効薬剤の情報が不明の場合や、防除効果が低かった場合は各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。

(2) アブラムシ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：ハウレンソウ・キク : 平年並

予報の根拠

- 1) 10月下旬の巡回調査では、発生ほ場率はキクで 20%でした。ハウレンソウでは発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) ネオニコチノイド系殺虫剤に対する感受性が低下したワタアブラムシを確認していますので、同一系統薬剤の連用を避け、効果が低い時は各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談下さい。

※農薬に関する情報は、令和3年10月27日現在の登録内容に基づいて記載しています。

お問い合わせは

奈良県病害虫防除所

TEL：0744-47-4481（直通）

その他関連情報は以下をご覧ください

奈良県病害虫防除所ホームページ

<http://www.jppn.ne.jp/nara/>

奈良県農薬情報システム（農作物病害虫・雑草防除指導指針）

<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/nara>